
さかき 榊の宮に建つ頌徳碑

いも類振興情報編集部

1. 湖北のシンボル

湖北とよばれる、滋賀県北部のシンボル伊吹山（1377m）は、まわりに高い山がないせいか、そびえるというよりはどしりと腰を落付けているようで、この地方のどこからでも眺められます。この辺りは本州ではいちばん幅の狭いところで、冬には北西の季節風が日本海から太平洋へと吹き抜けますが、伊吹山がそれを遮る位置にあるため、一帯に豪雪をもたらします。雪は昔からこの地帯に住む人の暮らしに大きな不便を強い、今でも農林業、東海道新幹線の運行をはじめとする陸上交通などの障害となっていますが、気象観測上重要な位置にあるため、大正7年(1918)伊吹山頂に側候所が設けられています。

冬の交通には難儀を伴うこの地ですが、関ヶ原から湖北の木の本へと通ずる道は北国脇往還とよばれ、交通の要衝で、東海・東国と北陸を結ぶ最短路として古来人、物資の往来がひきもきらず、大名の参勤交代の際の通りみちともなり、3ヵ所に宿場が設けられています。いまでは伊吹山南西山麓にスキー場が設けられ、関西・中京方面からの客で賑わうようになりました。さらに山頂付近は夏涼しいため登山のコース、あるいはキャンプ場など、レジャーの場所となり、昭和40年(1965)には関ヶ原から山頂に至るドライブウェイも開通し、最近では青少年旅行村も設けられて一大観光地ともなっています。

2. 薬草の山

この山は大宝律令の昔から薬草で知られ、数多くの詩歌にも詠まれ、葉は宮中にも献上されていますが、延長5年(927)に出された「延喜式」(延喜5年-905-に醍醐天皇の勅令により左大臣藤原時平が主宰して編集をはじめた日本の格式編集の最後のもの)の中には、当時の典薬寮（宮中の薬局）へ諸国から献上された薬草の種類と数量が記載されています。このなかでは近江国からがもっとも多く73種、次いで美濃62種、以下出雲、播磨、伊勢と続いています。近江と美濃が多かったのは伊吹山の薬草が献上されたためと考えられています。

江戸時代になってから幕府はたびたび採薬師を派遣して薬草の採集調査を行っています。8代將軍吉宗はとくに力を入れ、享保6年(1721)について同14年には登山口から山頂まで隈なく採集を行っています。また貝原益軒は宝永6年(1708)に「大和本草」を著わし、その中で伊吹山の薬草数種について解説していますが、その後著わされた植物の解説書の多くは、やはりこの地方産の薬草について紹介しています。

数ある薬草のなかでも、とくにもぐさは「伊吹もぐさ」として知られ、江戸末期の文化文政の頃には水車を利用した石うすでもぐさをつくるなど、農家が扱うばかりでなく専門に商う店も数軒に上ったと記されています。

薬効を高めるため、採集の時期はそれぞれの種類により異なりますが、多くは8月の旧盆の前がその適期とされていて、昔は農家の草刈の時期とも重なって繁忙を極めたといわれました。また、需要が高まるにつれて、自然に生育しているものを採るばかりでなく、必要に応じて広く栽培されるようにもなりました。暮らしに密着した薬草ですが、戦後医療の近代化によって一時やや下火とはなったものの、昭和50年代以降、ふたたびその真価が見直されるようになって、今日では採集と栽培は新らしい地域産業へと発展の兆しを見せています。

現在伊吹山には240種類以上の薬草が生育しているといわれます。そのいくつかを記せば次のとおりですが、意外なものに思いがけない効き目があるのには驚かされます。

ウツボグサ…花穂に殺菌・消炎・利尿効果
オオヨモギ（イブキヨモギ）…葉の裏側の
白い綿毛を集めてもぐさにする

イブキジャコウソウ…株全体に芳香があっ
て食品の香料に用いる

ゲンノショウコ…陰干しにして煎じ下痢止
めとする。効果が高いので「現の証拠」
の和名がある

センブリ…健胃薬として消化不良、食欲不
振に用いる

ミヤマトウキ…株全体に香気があり、茎葉
は冷え症、腰痛治療の浴用

カタクリ…球根からでん粉をとり、滋養強
壮剤としてくず湯状にして服用

メギ（コトリトマラズ）…木部の煎汁を洗
眼剤とするほか、殺菌、健胃食欲増進剤

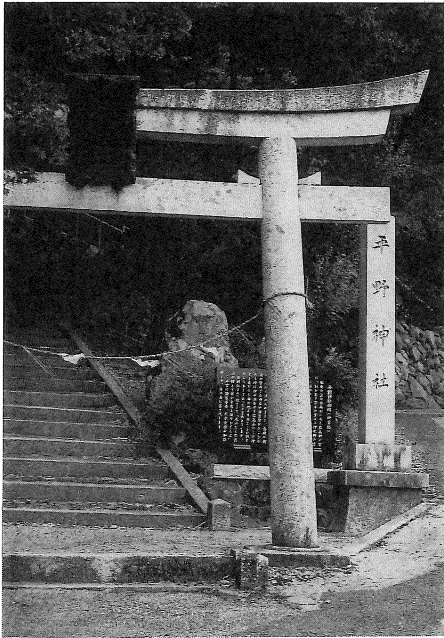
かつて北国協往還に置かれた宿場の一つ春
照（現坂田郡伊吹町春照）には伊吹薬草の里

文化センターがあって、特色ある薬草のほか薬効のある草木・ハーブ類が、あるいは花壇状に、あるいは自然林に似せて植えられ、そのなかをゆっくりと散歩しながら鑑賞できるように展示されているほか、伊吹山を間近に仰ぎ見ながら自然あふれる環境のなかで湯治を楽しめる露天の薬草風呂もあって、人気を博しています。

3. 荒地を拓いて

薬草という天からの授かりものに恵まれた伊吹の地ですが、ここに暮らす人々は農を生業としていました。古来この地の産物としては、そば（蕎麦）と大根が有名で、伊吹山は日本のそばの発祥地とされています。それは砂そばとよばれ、小さな砂を噛むような歯ざわりとコクが珍らしがられました。ねずみ大根、けつからかし大根の名で知られる伊吹大根は荒地に適していて、独特の辛味が喜ばれました。松尾芭蕉の門人森川許六は著書「本朝文選」のなかで「伊吹蕎麦天下にかくれなければ、からみ大根又此の山を極上とさだむ」と述べています。

しかし、現実には此の地は冬の積雪が多いうえ、川の流れによって形づくられた扇状地は砂礫が多く、栄養分が少なく、日当たりがあって水利の便のあるところは水田にされたものの、残りの山陰、傾斜地などは畑作に用いられました。明治のはじめ頃までは各地でも行われていた焼畑農業が営まれ、地力の落ちた耕地は放置されて回復をまってからまた用いられていましたが、砂質で粘り気が少なく、また多量の転石のあるところでの農業は苦勞が多く、農耕はまず石を拾い出すことから始まった、と言い伝えられています。瘠地で



平野神社

の農耕は地力を増進しなければならず、良質の草の確保が欠かせませんでした。この点では幸いなことに、伊吹山は麓の森林地帯を除けば1合目から山頂まで樹林地はほとんどなく、全山がよい草刈場となりますが、同じ山でも山頂に近いほど草は柔かく、刈りやすくなりますので、農民は競って条件のよい場所に入りました。

6月末から9月までが最盛期で、このときは女性、子供も従事しましたが、刈り取った草は2、3日干して軽くしたのち、半ばは背負い、残りは土そり（しゅうろ）に積んでおろしました。伊吹山の草は養分が豊富でよい肥料となり、また役畜（主としてウシ）の飼料としても最高のものとされました。このような努力をして拓かれた畑地では、ムギのほかヒエ、アワ、キビなどの雑穀が作られ、副食としては野菜、山菜が多く、生計を補うために

養蚕がとり入れられ、炭も焼かれましたが、自生の繊維植物に恵まれていましたので、幸いにも衣類の自まかないはできました。

江戸末期には天明・天保と飢きんが相次ぎ、全国的にかなりの餓死者が出るような悲惨さで、食糧の確保は街の住人はもとより、生産者である農民にとっても深刻な死活問題となっていました。このような打ち続く食糧不安の世で、サツマイモ、ジャガイモなど、いもを作っていたところでは、餓死者が全くないか、あるいはきわめて少なかったのですが、ここ伊吹山麓でも江戸末期にサツマイモの栽培がはじめられています。

4. 幸運、サツマイモとの出会い

文化5年（1808）近江国坂田郡弥高村^{やたか}に生まれた松本五郎平は、豊かでない村人の暮らしを少しでもよくしようと、果樹栽培を試みましたが、一つとして目的に叶う結果が得られませんでした。たまたま安政年間（1854～60）にサツマイモを尾張（愛知県）から入れて試作したところ、この地が砂質土であったこともあって成功し、村の人たちにも勧め、またたくうちに広く栽培されるようになりました。飢きんが続いた天明（1781～89）天保（1830～44）の時代から、かなり後のこととなりますが、五郎平は、語り継がれている飢きんの惨状に胸をいため、何とかしなければ、との思いは強かったことでしょう。尾張に旅した折にサツマイモの畑を見て、これを作ればあるいは村人を飢餓から救えるかもしれないと思い、種苗を分譲してもらって試作したとされています。

五郎平がサツマイモをはじめて見た尾張地方は温暖な気候に恵まれているにもかかわらず

ず、サツマイモが作られるようになったのは安政年間と比較的おそく、これは営農条件がよくて西日本の海岸地方・島嶼のように飢餓に襲われる頻度が少なかったからでしょうか。それとも農民がサツマイモに接する機会がなかったからでしょうか。いずれにしても作られるようになってから間もないサツマイモを見ることができた幸運に恵まれ、五郎平は種苗を分譲してもらえこととなりました。

尾張と伊吹山麓は、地理的にはそれほど離れてはいないものの、気象条件には大きな違いがあり、後者は裏日本気候の影響を受けて冬は低温多雪であり、春の訪れもややおそく、サツマイモ栽培には最適の地とはいえません。にもかかわらず、後に述べるように出荷先の各地で絶讃を得た、高品質のイモがとれるようになったのは、五郎平をはじめ村人の熱意によることはもちろんですが、畑地が南斜面の砂地で乾燥し、夏季は日中気温が昇り、夜は冷えるという、サツマイモ栽培に関しては気候土壌条件に恵まれていたからかもしれません。

弥高村は伊吹山南麓の坂口にあるため、古くは坂口村、弥高坂口村といわれ、明治のはじめ頃の地目は、水田4町3反(4.3ヘクタール)、畑地13町6反余、山地203町となっており、戸数48、人口215、全戸農家で明治11年にはサツマイモの作付面積は12町8反で収量は26,500貫(約100トン)と記録されています。これによると、畑地のほとんどにサツマイモが作付され、ほかの作物はないようになりますが、実際には山地も相当に開かれて、そこにサツマイモが植付けられたのかもしれない。

南面傾斜の砂地でとれたイモの味は良く、



松本五郎平翁頌徳碑

滋賀県知事正五位勲四等平敏孝篆額

五郎平翁文化五年生近江坂田郡弥高村父五郎介之嫡子也村在伊吹山麓之高地素無水田傾斜之白田僅作豆黍又蠶桑樵炭以立活計翁常憂之自試各種果樹苦辛多無一副目的者安政中求甘薯苗于尾張試栽培之成果創可見翌歲擴張殖栽功績愈良好也於是勸村人共同以勵業收穫益多乃驚之遠近弥高甘薯之名漸高村授歲殖炊烟月太翁始有喜色焉天寿九十六明治卅五年三月歿矣今茲村人等欲建碑記功報恩未請銘美舉不可辭乃銘勤儉起業賑恤一鄉其功基德山秀水長

昭和丁丑卯月章齋中川成秀并書

松本五郎平翁の頌徳碑と碑文

村での消費を満たしたのち、近くは彦根、長浜など県内の町に、遠くは大阪にまで出荷されて「弥高いも」の名で知られるようになりましたが、この弥高村での成功にならって、近隣の村でもサツマイモの栽培が増えてゆきました。

その後生産は着実に伸び、とくに第二次大戦時の国内の厳しい食糧事情から主食として位置づけられるようになり、この頃の生産高は明治初年の約4倍の10万貫(375トン)に達しています。

松本五郎平は明治35年(1902)96歳の夭寿を全うして亡くなりましたが、村人はサツマイモ普及の大恩人である翁の功績を讃える碑を建立しています。現在坂田郡伊吹町の大字となっている弥高の地は、民家が南面の傾斜地に寄り添うように集中していて、そのいちばん高いところに平野神社が鎮座しています。この社の創祀は宝亀9年(778)と伝えられ、古来^{さかき}榊の宮と称されてきましたが、いまでも榊の大樹が昼なお暗くうっそうと茂っています。常時は神主さんのおらない社となっていて、急な、長い石段の昇り口からやや離れた広場にこの頌徳碑は建っています。昭和12年(1937)の建立で、部落の人のほかは詣でる人も稀で、町内でもその存在はあまり知られてないようですが、碑には五郎平翁の生いたち、サツマイモ試作への歩みとその成功、村人の翁に対する感謝の念が詳細に刻まれています。

5. 復活への道

昭和40年(1965)頃から全国的に野菜果樹栽培、畜産業が伸び、それに反してサツマイモ生産は次第に減少してゆきますが、弥高の地でも同様の傾向をたどりしました。第二次大

戦後食糧事情が好転するにともなって、サツマイモは生産過剰気味となり、昭和24年(1949)には、これを原料とするでん粉工場も設けられましたが、特別な需要はあるものの、一般的にはでん粉そのものの品質がジャガイモからつくられるものと比べてどうしても劣り、同40年頃には操業が停止されています。でん粉用ばかりでなく、一般食用としての需要も減り、また高品質のイモを多量にまとまって産するところに生産地が特化される傾向にあるため、弥高のサツマイモもほとんど姿を消したように衰退してしまいました。しかし、往年の「弥高いも」の名声を復活させよう、との動きがあつて、ここ数年次第に栽培面積も増えてきました。いまでは往年には比すべくありませんが2ヘクタールほどの作付があり、多くはこの地の名産であるカキ栽培と組み合わせた観光イモ堀り園として経営されています。

編集後記 昨夜の雨ですべる坂道をくだる途中、雲にかくれはじめた斜陽が里山の樹々をうすい茜色に染めはじめました。春から夏にかけて美しい音色と可憐なしぐさで楽しませてくれた小鳥たちは、どこへ行ってしまったのでしょうか。パサ、パサと散りゆく落葉のほかは静寂のときが流れてゆきますが、ポツンと1本たわわに実をつけた、ひときわ高い山ガキが嬉しい稔りのときがきたよ、と呼びかけるように深まりゆく秋にいろどりを添えています。

いも類振興情報 第73号

平成14年10月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社